明日への道標

一番の夢は永遠の失業だ
―戦場カメラマン キャパ―

㈱日本設備工業新聞社
代表取締役社長　高倉克也

ふたりの写真家は生い立ちが似ていた。ユダヤ系ハンガリー人のアンドレ・フリードマン（1913－1954）とユダヤ系ポーランド人のゲルダ・タロー（1910－1937）はナチス・ドイツの弾圧を逃れ、フランスのパリで運命のように出会う。

無名のふたりは作品を売りやすくするために架空のアメリカ人写真家ロバート・キャパを創造した。スペイン内戦を取材した報道写真が反響を呼び、とくに「崩れ落ちる兵士」は反ファシズムの象徴としてキャパの名声を全世界に轟かす。

だがふたりの共同作業は長くつづかなかった。取材中のゲルダが予期せぬ事故で夭折する。最愛の女性を失ったアンドレは失意のどん底から再起し、キャパの名を引き継いで戦場を駆けめぐった。

真実をリアルに伝えて

のちにキャパとなるアンドレはハンガリーの首都ブダペストの洋服店の次男として生まれた。中高一貫のギムナジウム入学後、左翼運動に参加して逮捕される。釈放後、ベルリンに移り住み、ドイツ政治高等専門学校ジャーナリズム科に入学して世界を飛びまわる報道写真家をめざす。

この頃、デンマークの首都コペンハーゲンを訪れ、レーニンと共にロシア社会主義革命を牽引したレオン・トロツキーの激烈な演説写真を撮って話題になる。トロツキーはレーニンの死後、独裁者となったスターリンの粛清を逃れてメキシコに亡命したものの、スターリンの刺客に暗殺された。

ロバート・キャパ

ゲルダ・タロー

ドイツではナチスによるユダヤ人迫害が激化し、アンドレはパリに渡って再出発を期す。だが写真はまったく売れず、不遇の日々を送った。

やがてアンドレのパートナーとなるゲルダはドイツ・シュトゥットガルトの中流家庭で生まれた。本名はゲルタ・ポホリレ。スイスの寄宿学校に通い、帰国後は左翼組織で活動した。弟たちと反ナチスのビラを撒いて逮捕されたこともある。

ヒトラーが政権を奪取するとパリに移り、境遇の似通ったアンドレと出会って撮影技術を学んでいく。彼を通じて日本の留学生たちと親しくなり、のちに芸術家として大成する岡本太郎にちなんでゲルダ・タローと名乗るようになる。

アメリカ市場で作品が高く売れるように創作したキャパという印象的な名前は著名な映画監督のフランク・キャプラから思いついた。1936年にスペイン内戦が勃発すると、ふたりはロバート・キャパとして命がけの取材を開始する。

スペイン内戦は反ファシズムの人民戦線政府とフランコ将軍が率いるファシスト軍が対峙する歴史的な戦いとなった。キャパの名を一躍有名にした「崩れ落ちる兵士」は人民戦線政府の兵士が銃撃されて倒れる瞬間をとらえた奇跡的な写真として全世界に衝撃を与えた。フランコを支援するナチスの無差別爆撃の悲劇を描いたピカソ畢生の大作「ゲルニカ」と並んでキャパの写真は悲惨な戦争の真実をリアルに伝えていく。

私のカメラは大丈夫？

決死の覚悟で戦場写真を撮りつづけたゲルダはアンドレのプロポーズを断り、独立して活動するようになる。作家のアーネスト・ヘミングウェイやジョージ・オーウェルが所属する反ファシズムの国際旅団と交流を深め、フランスの左派系新聞ス・ソワールと独自に契約した。女性として史上初の報道写真家となったゲルダの作品は自立して脚光を浴び、アメリカの『ライフ』などメジャーな写真誌に掲載されるようになった。

1937年７月25日、ゲルダは国際旅団のカナダの作家とブルネテの戦いの取材に向かう。現地に着くとフランコ軍が優勢で人民戦線政府軍は撤退を迫られていた。混乱する道の途中で彼女は負傷兵を運ぶ将校用のオープンカーを発見する。同乗しようとステップに足をかけた瞬間、迷走した政府軍の戦車に巻き込まれて瀕死の重傷を負った。政府軍の野戦病院に緊急搬送され、ただちに手術を受けたものの、翌日に息を引きとる。８月１日に27歳の誕生日を迎えるはずだった。手術後、いったん意識を取り戻したゲルダは「私のカメラは大丈夫？まだ新品なのよ」と語ったという。

葬儀はフランス共産党を中心にパリで壮大に営まれた。反ファシズムのシンボルとなった彼女のために彫刻家のアルベルト・ジャコメッティが墓碑をデザインする。ナチスによるパリ占領後、ゲルダの墓碑銘は削り取られた。ジャコメッティは戦後ふたたび新たな墓碑を制作する。

ゲルダの突然の死はアンドレに巨大な喪失感をもたらした。何日も部屋に閉じこもり、酒を飲んでは泣き明かす。ようやく涙が涸れ果てたときアンドレはただひとりのキャパとして生きていくことを決心する。その証しとしてゲルダが死去した翌年、キャパとゲルダの初の共作写真集となる『生み出される死』を刊行する。

再起したキャパは「撮影する人間を好きになれ。そしてそれを相手に伝えろ」と人間を撮ることに徹底してこだわった。相手を思いやるやさしさはゲルダから学んだのかもしれない。

十字架を背負い最前線へ

40年の短い生涯にスペイン内戦、日中戦争、第２次世界大戦ヨーロッパ戦線、第1次中東戦争、第１次インドシナ戦争と５つの戦争を取材し、20世紀を代表する報道写真家と讃えられたキャパは栄光の座を一気に転落するような秘密を抱えていた。彼の死後、一世を風靡した「崩れ落ちる兵士」の写真は訓練中の出来事であることが判明する。ノンフィクション作家の沢木耕太郎は2013年に発刊した『キャパの十字架』で崩れ落ちる兵士は撃たれたのではなく転びそうになった瞬間に撮影されたことを綿密に検証している。さらにキャパが愛用していたライカと写真の縦横の比率が整合せず、ゲルダが使っていたローライフレックスに合致することを物理的に証明した。つまりゲルダが「崩れ落ちる兵士」を撮影したということだ。

戦場カメラマンとして決して許されない行為になぜキャパが手を汚し、沈黙したままだったのか。反戦反ファシズムの希望の灯を消さないためにという見方もある。キャパは崩れ落ちる兵士の十字架を背負い、戦闘の最前線で取材を決行した。1944年、ノルマンディー上陸作戦に同行し、最大の戦死者を出した激戦地オマハ・ビーチで連合国軍とナチス・ドイツの銃弾が飛び交う中、100枚以上の写真を撮影する。しかし助手が現像に失敗し、使える写真は10枚程度しか残らなかった。

戦後復興期の1954年４月に毎日新聞の招待で来日し、東京、京都、大阪などで市井の人々を取材する。５月に第１次インドシナ戦争の取材で北ベトナムに赴き、小川の堤防に仕掛けられた地雷を踏んで爆風と共にこの世を去る。

生前「私の一番の夢は永遠に失業することなんだ」とユーモアを交えて語っていたキャパは戦場カメラマンを永遠に必要としない世界を夢見た。